大学新聞 No.110

6・10決定実質化進む

文欠席のまま開かる
六・四評議会

四日夜、評議会が秘密裡に開かれた。文学部には、大島前学部長、西山、関根前両評議員に電話連絡があったが、和歌森学部長代行、および入江、星野評議員代行は一切知らぬまま、結局、文欠席のまま急行された。席上、文学部長代行から学長に出されていた文部省交渉は土地渡候の希望表明で移転決定ではないとの文書は、紹介されただけで全く討論されなかった。概算要求はほぼ確定されたが、調査費は計上されていない。また移転協議のための三者協議会（文部省、首都圏整備委、教大）が近く開かれる予定で、その具体的人選案が話された模様である。

また、評議会団交については、各学部の自主性にまかせるとの事である。なお、広報部を設置し、広く内外に、評議会の意向をPRする予定である。

文教授会スト解除を説得

昨日、文学部教授会終了後、対教授会団交が行なわれ、公開質問状について質疑応答が行なわれた。明らかにされた教授会の意向は次のようなものである。①五学部長団交については、他学部に説得する。②[illegible]文欠席のまま四日の評議会が行なわれたことは遺憾である。③移転協議会、調査費計上については不明。

教育学部 文教授会を説得へ

教育学部教授会では、十日の評議会、十九日の文部省交渉の相対会について審議され、いずれも「了[illegible]上げ相別、内容については後日に回すとの結論に達した。それに従って、文教授会には、非公式にであるが「柔軟性を持つように」と説得していくことになった。

農学部 あくまで「統一キャンパス」を固執

農学部教授会は、六・一九文部省交渉に関して、形式的には確認するが、内容的には、審議を要するという結論である。教授会の途中、学生委員を通じて学生に、〝評議会報告〟を行うことが実質上[illegible]され、教授会終了後に[illegible]という形で要望書に[illegible]。

六・二二文教授会声明に対し、農教授会としては、「本教授会は従来同一キャンパスを主張してきたし、将来にわたり、その努力をする。」文教授会は、〝協議の精神からはずれているのではないか。時間的要素も加えて、将来とも同一キャンパスの「[illegible]」という主張の回答があった。

又、文部省交渉については、合理的に確認されている。条件は早急に検討するなど明らかにされた。

本日学生大会！

文学部は、本日、午后一時から25の/で、学生大会を開く。二十日スト突入以来三回目の大会であるが、この大会で現在の膠着状態を打開することは必須であろう。

主張
〝教授の説得工作〟を断固拒否すべし!!

今日で文学部がストライキに入ってから十七日目になる。にもかかわらず、スローガンにかかげたものはいまだ何一つかちとられていない。その間、土地確保の意向表明が行なわれ、その実質化のための、移転推進のための〝教授会説[illegible]が来週にも発足されようとしている。加えて、四日に又もや学外へ大学のキャンパスでなく、都内某所）で秘密裡に評議会が開かれ、来年度の予算案をはじめ、重大な審議がなされたという。このように進展する移転推進の動きに対して学生は、ますますスローガン達成の要望を[illegible]で、学生の中でも、展望がない、故にストライキを止めよう、というムードが次第に高まってきている。それに対して、教授会は、ストを止めなければ評議会団交は無理という、自己の責任を回避した学生への説得を強めている。

しかし、「展望がない、故にストライキを解除する」ということによっては、6・10白紙撤回の展望は一歩も開けないであろうし、ストライキによって大学の主人公としての権利宣言をなした我々学生が「団交を行なうためにストを解除する」ということは、またしても大学における[illegible]としての[illegible]地位に埋没するということでしかなく、そのようにして行なわれる〝団交〟なるものはまさしく、移転大学当局の我々に対する〝懐柔〟のための、いや、「弾圧」のためのものでしかない。

我々は、今や十七日間のストライキの中で何故展望を切り拓くことができなかったのかというところに問題をたてなければならない。十七日間を清算することは出来ないのだ。多くの学生が実感的に認識しているように、移転斗争は運動が手続的に「民主的」であったか否かの問題ではない。我々の大学が権力の政治に対して全く自主的な判断をなし得ないという大学秩序に対する批判を通じてストライキの意味を内実化させなければならない。

現在的方針は何か。6・19文部省交渉表明の実質化をはかるために〝協議会〟〝調査に計上〟がすでに事務レベルで決定されつつあるとき、評議会団交を通しての移転白紙撤回の緊急性は増している。